

2017年度 自己点検・評価【社会学部】

C票

<目標、行動計画>進捗確認シート

提出日:2018年2月22日

2021年度に向けた教育研究目標

責任者	社会学部長	作成部局	社会学部
-----	-------	------	------

【A票:教育研究目標1】

(タイトル)

建学の精神にもとづいた人格形成を促すとともに、社会・文化・人間への深い関心を育成し、生涯にわたる主体的・能動的な学習態度を育成する。

(狙い内容)

正課教育内外を通して、“Mastery for Service”の精神について触れる機会を増やすとともに、社会・文化・人間への深い関心を刺激する知的・実践的環境を整備する。さらに、4年間を通じた演習教育と、「共同学習室」を中心とした「ピア・エデュケーション」の強力な推進によって、生涯にわたる主体的・能動的な学習態度の育成に努める。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

“Mastery for Service”の精神について、授業、チャペル、学部独自の「学生交流プロジェクト」(ピア・サポート)など、正課教育内外を通して、多くの学生が触れる機会をもつ。また、社会学を中心とした正課内教育とともに、ボランティア活動などの実践を通して、社会・文化・人間への深い関心を刺激する知的・実践的環境を整備する。さらに、4年間を通じた演習教育や、「共同学習室」を通じたさまざまな「ピア・エデュケーション」プログラムに多くの学生が参加することによって、生涯にわたる主体的・能動的な学習態度を育成する条件が整う。

2. 達成度評価

評価指標	この教育目標は、その達成度を直接的かつ数量的に測定できる種類のものではない。したがってこの教育目標の達成度を評価する指標は、むしろこの教育目標を達成するための、(正課教育内外を通じた)さまざまな活動の向上や環境の整備(下記の行動計画)を示す指標によって、代替すべきものである。	評価尺度	A : B : C : D :
------	--	------	--------------------------

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時点								
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D							
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)							

【2017年度の進捗状況について】

2017年度は、2016年度同様、主体的・能動的な学習態度を育成する環境に身を置く学生の割合をより高めるために、正課外教育においては「入学式等でのPSメンバーによる広報活動」及び「日々の継続的な広報活動(教学Webサービス・掲示・SNS等)」を積極的に行なったことで、学生交流プロジェクトへの参加者数の大幅な伸びに繋がっている。さらに、学習会の企画に関しては、2017年度から学生の自主企画をより推進している。結果として、2017年度は学生自らの企画申請があり、それに対して教職員が指導・サポートをすることでさらなる成長を促すことに繋がっている。今後は学習会に関して、さらに学生の自主企画を促すための仕組みづくりを目指し、検討する予定である。また、正課教育においては、4年間を通じた演習教育を本格化させていることによって、主体的・能動的な学習態度を育成する環境がより整いつつあり、さらにそれを促進していく方向である。なお、行動計画①において、2016年度で実績が下がっているのは、教員による社会心理実験室の使用が2015年度が特別に多かったためであり、その他の利用数は増加している。したがって、問題ないと判断する。

2017年度 of 取組み状況の確認

2017年度 of 取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか?

→ はい・いいえ

※上記の目標、行動計画の進捗に関する参照URL【任意】

<https://www.facebook.com/kgsociokvodo>
<https://twitter.com/kgsociokvodo>
https://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/news/2016/news_20160804_010627.html
https://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/s_sociology_004919.html

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 行動計画①・②ともに順調に進展しています。行動計画①と③の評価尺度については見直しが期待されます。(A)
- ・ 順調に進捗しており、評価できます。(B)
- ・ 行動計画③の「学生交流プロジェクト」参加者数が顕著に増加しており、学部内で学生と教職員が上手く関わりながら学生の主体的、能動的な学びが推進されている様子が窺えます。全学的なモデルケースとなるような、更なる取組みの促進を期待しています。(C)
- ・ 行動計画①～③まで順調に進展しています。(D)
- ・ 主体的・能動的な学習態度を促す学部の取組みが順調に進んでいます。行動計画を含めた進捗状況が詳細に把握され、記述されていることは評価できます。学習態度を把握することは困難ではありますが、施設の利用数や企画の開催回数だけではなく、演習での学生の関わり方などから把握しようとするということについても検討することが望まれます。(E)
- ・ 量的評価指標がなじまないということですので、質的な評価指標を設定してください。(F)
- ・ 行動計画③について、学生交流プロジェクトが順調に成果をあげていることは大変評価できます。今後の進展が期待されます。(G)
- ・ ピア・エデュケーション関連施設の利用総数、共同学習室での学習会の回数、「学生交流プロジェクト」(ピア・サポート)への参加者数はいずれも前年度に対して着実に増え、新たな学習機会として定着してきたことがうかがわれます。大いに評価できます。(H)
- ・ 共同学習室等の利用、学集会の開催、学生交流プロジェクト参加者数は、順調に進展しています。(I)
- ・ 順調に進捗していますが、達成度評価にも評価指標、評価尺度の設定があるとより良いと思われれます。(J)

【A票:教育研究目標2】

(タイトル)

幅広くかつ系統的な社会学的知識・思考・技能にもとづいた、社会で求められる「社会学的想像力」を育成する。

(狙い内容)

2016年度施行の新カリキュラムは、これまでのカリキュラムが重視してきた幅広い学習内容に加えて、系統的な学習と方法(メソッド)を重視して、6つの「専攻分野」(「現代社会学」、「データ社会学」、「フィールド社会学」、「フィールド文化学」、「メディア・コミュニケーション学」、「社会心理学」)を設置する。これによって、より焦点の定まった学習を可能にするとともに、方法(メソッド)にもとづいた学習を実現し、学生が卒業後に直面するさまざまな問題に対して、一貫した方法的態度にもとづいて対応することができる「社会学的想像力」を育成する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

2020年度には、新カリキュラムが完成年度を迎える。学生は、幅広い学習内容に加えて、系統的で方法(メソッド)を重視した学習によって、社会学・社会心理学的方法(メソッド)ばかりでなく、人類学や民俗学など隣接諸科学の方法(メソッド)も含めて、それぞれの「専攻分野」で学習することが可能になる。これによってそれぞれの「専攻分野」で、より焦点の定まった学習、方法(メソッド)にもとづいた学習が実現され、さまざまな問題に対して、一貫した方法的態度にもとづいて対応することができる「社会学的想像力」の育成が進む。

2. 達成度評価

評価指標	専攻分野と卒業論文の適合率	評価尺度	A : 80%以上 B : 70%以上80%未満 C : 60%以上70%未満 D : 60%未満
------	---------------	------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		C 60%	C 60%	C 65%	C 65%	B 70%	B 70%	A 80%
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	C	C	実績	C			
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	60%	60%		60%			

【2017年度の進捗状況について】

2017年度は、目標に向け、新カリキュラム(2016年度以降入学生対象)のもと、行動計画①・②を順調に実施できており、それが結果として数値に表われているので、継続的に推進していく。なお、評価指標に記載している「専攻分野」は、新カリキュラム(2016年度以降入学生対象)で設けられた仕組みであり、このカリキュラムでの学びを通して作成される卒業論文が提出される初年度は2019年度である。そのため、2018年度までは旧カリキュラム(2015年度以前入学生対象)での学びを通して作成される卒業論文である。ちなみに、旧カリキュラム(2015年度以前入学生対象)は、3系7領域にわたる幅広い学習内容の提供を重視しているため(逆に系統的・段階的学習の側面に不十分さがあることは否めない)、それが適合率の伸びを抑えている主要因となっていると考える。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → はい いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 順調に進展しています。(A)
- ・ 行動計画①、②ともに大きく進捗しており、大変評価できます。(B)
- ・ 行動計画①、②ともに飛躍的に取組が進捗している様子が窺えます。引き続き意欲的に取組を進めていただくことを期待します。(C)
- ・ かなり順調に進捗していて評価できます。(D)
- ・ 新カリキュラムへの移行期のため、現時点で指標には反映されていませんが、目標達成に向けた取り組みは進んでいると思われます。指標に表れていない要因についても分析されるなど、自己点検・評価の真摯な取り組みも評価できます。(E)
- ・ 順調に進捗しています。行動計画1は達成できているので新しい計画へ発展できます。(F)
- ・ 順調に進展しています。(G)
- ・ 前年度の第三者評価の意見(「専攻分野と卒業論文が適合しないことの要因分析をすることが期待されます」)への対応が適正にできています。
- ・ 新カリキュラムの完成年度に向けて、新2年生ガイダンスへの出席率、ゼミにおける履修指導の充実が図られており、高く評価できます。(H)
- ・ 行動計画②で、ゼミにおいて履修指導を行う学生比率の大幅増は評価できます。数値をどのように把握しているかの記載が期待されます。(I)

【A票：教育研究目標3】

(タイトル)

フィールドワークを含む社会調査についての基礎的な知識と技能にもとづいた、社会で求められる「社会調査の実践力」を育成する。

(狙い内容)

2016年度施行の新カリキュラムは、社会調査関連科目の段階性を明確にするとともに、新たに「リサーチ・メソッド科目」を導入し、さらに「データ社会学専攻分野」「フィールド社会学専攻分野」「フィールド文化学専攻分野」を設置した。これによって、これまで以上に、フィールドワークを含む社会調査についての知識と技能にもとづいた、社会で求められる「社会調査の実践力」を育成する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

2020年度には、新カリキュラムが完成年度を迎える。学生は、段階的・系統的に社会調査関連科目を履修し、さらに所属する「専攻分野」で求められる「リサーチ・メソッド科目」を履修しながら、とくに「データ社会学」「フィールド社会学」「フィールド文化学」の各「専攻分野」に所属する学生は、フィールドワークを含む社会調査の知識と技能を重点的に学習することによって、これまで以上に、フィールドワークを含む社会調査についての知識と技能にもとづいた、社会で求められる「社会調査の実践力」を育成することを目指す。

2. 達成度評価

評価指標	全実習科目履修者に対するフィールドワークを行う社会調査実習履修者数の比率	評価尺度	A : 40%以上 B : 30%以上40%未満 C : 20%以上30%未満 D : 20%未満
-------------	--------------------------------------	-------------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		B 37%	A 42%	A 40%	A 40%	A 40%	A 40%	A 40%
	評価 尺度: A~D	B	A	A				
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	実績	B	A	A				
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	37%	42%	40%				

【2017年度の進捗状況について】

2017年度は、新カリキュラム(2016年度以降入学生対象)のもと、行動計画①・②を軸とした取り組みにより、目標に向け順調な進捗状況である。なお、現在定めている評価指標や評価尺度、行動計画については、新カリキュラムの完成年度を迎えていないため、全ての項目において変更せず、継続的に推進していく必要がある。ちなみに、目標に対する評価尺度の設定については、現時点で既にAに達しているものの、6つの専攻分野に基づく社会学部カリキュラムの理念を踏まえると、現在の評価尺度をより高めることは適切ではないため、変更する必要性はないと判断する。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → **はい**・いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 順調に進展しています。(A)
- ・ 行動計画①, ②の取組みを着実に進め、社会学部の学生の主体的・能動的な学びが一層進むことを期待しています。(C)
- ・ さらに高次の目標・目標値の設定が望まれます。(D)
- ・ 新カリキュラムへの移行期のため、現時点で指標には反映されていませんが、目標達成に向けた取り組みは進んでいると思われます。指標に表れていない要因についても分析されるなど、自己点検・評価の真摯な取り組みも評価できます。(E)
- ・ 順調に進捗しています。教育研究目標2と同じ指標である行動計画1は達成できているので新しい計画へ発展できます。(F)
- ・ 順調に進展しています。(G)
- ・ フィールドワークの実施率については、前年度の第三者評価の意見にある通り、2021年の目指す姿(目標)実現のために掲げられた目標値がすでに「A」に達していますので、より高い次元を目指す新たな目標や目標値の設定が期待されます。(H)

【A票:教育研究目標4】

(タイトル)

グローバル化した現代社会で活躍できる人材を育成する。

(狙い内容)

確かな言語能力(とくに英語力)にもとづいて、異なる地域や文化を体験するとともに、グローバル化した現代社会の現状や問題点を社会的に理解することによって、多様化する現代社会で活躍できる人材を育成する。

1. 教育研究目標を実現する上での2021年度のめざす姿(目標)

多くの学生が、確かな言語能力(とくに英語力)を身につけ、海外への派遣(交換留学、中期留学、外国語研修等)の経験や「フュージョン(融合)プログラム」参加によって、異なる地域や文化を体験するとともに、グローバル化した現代社会の現状や問題点を社会的に理解することによって、多様化する現代社会で活躍できる人材を育成することを目指す。

2. 達成度評価

評価指標	協定に基づく海外への派遣学生数とフュージョン(融合)プログラム参加学生数の総数	評価尺度	A : 100名以上 B : 85名以上100名未満 C : 70名以上85名未満 D : 70名未満
------	---	------	--

3. 年度毎の目標値

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
2016年度 自己点検・評価時 点		C 81名	C 81名	C 80名	B 85名	B 90名	B 95名	A 100名
2017年度 進捗状況 & 今後の 目標値	評価 尺度: A~D	C	A	実績 A				
	見込・ 実績・ 目標 (値又は 状況)	81名	140名		117名			

【2017年度の進捗状況について】

全体として、行動計画①～③に加え、従来からの継続的かつ積極的な留学制度等に関する広報活動により、結果として留学プログラム参加者数の大幅な伸びに繋がっているため、順調な進捗状況である。なお、行動計画①では交換留学プログラムへの参加者数に大きな伸びは見られない。これは、留学費用を理由に交換留学への参加を諦めざるを得ないことが要因であると考えられる。その一方で、そういった要因をクリアする短期プログラム(語学研修あるいは英語中期留学)での参加者数に大きな伸びが出ており、総じて目標に近づいていることが窺える。また、2018年度から成績上位者を対象とした留学プログラムに関する説明会を実施する方向で検討を始めており、さらなる伸びが期待できる。行動計画②はカリキュラム上必要と判断した協定に基づく協働学習型プログラムであり、その性質上定員に上限を設けている。むしろプログラム内容が充実しているからこそニーズが高まり、参加者数が常に上限をキープしているため、評価尺度を変更する必要はないと考える。行動計画③については、新たな英語のカリキュラムのもとで学ぶ学生は2016年度以降入学生であるため、その成果が表れるのは2018年度以降である。現在、入学時点からの習熟度別クラス編成に加え、より高度なレベルの英語の選択授業を提供するなど、学生の英語力アップを図るカリキュラムにて学ぶ学生の割合が高まっている。

2017年度の取組み状況の確認

2017年度の取組みは、当初の目標どおりに進んでいるか? → はい・いいえ

<評価専門委員・第三者評価結果> 2017年12月22日公示

- ・ 目標に向けて順調に進展しています。行動計画①の進展が期待されます。(A)
- ・ 順調に進捗しており、評価できます。(B)
- ・ 2017年度の進捗状況の記述欄からは、学生に対する広報活動等により、学生の学びが海外に広がっている様子が窺えます。引き続き積極的な広報、働きかけを期待しています。(C)
- ・ 順調に進展しており大変評価できます。行動計画①については、さらなる改善が期待されます。(D)
- ・ 台湾の大学との学部間協定に基づくプログラムの開発など、全学的な施策に沿った積極的な取り組みです。
- ・ 新カリキュラムへの移行期のため、現時点で指標には反映されていませんが、目標達成に向けた取り組みは進んでいると思われます。指標に表れていない要因についても分析されるなど、自己点検・評価の真摯な取り組みも評価できます。(E)
- ・ 順調に進んでいます。(F)
- ・ 順調に進展しています。(G)
- ・ 交換留学、中期留学、外国語研修等の経験者が着実に増えていることは、評価できます。また、「フュージョン(融合)プログラム」への参加者も、一定数が確保できていることが評価できます。TOEICの平均スコアの大きな伸びは、高く評価できるので、今後の維持が課題になってくると考えます。(H)
- ・ 海外派遣学生数、融合プログラム参加学生数は順調に推移しています。(I)
- ・ 順調に進捗しています。(J)